エズラ記とネヘミヤ記
現代のほとんどの聖書ではエズラ
記とネヘミヤ記は別々の書ですが そのように分けられたのは書かれた
ずいぶん後の時代でした この二つは同じ著者による一つの
書物だったのです その内容はバビロンがエルサレム
とその神殿を破壊し 多くの民を捕囚にしたあとのこと
です それから五十年後イスラエル人の
一部がエルサレムに帰還し 街を再建し
再びそこに住み始めようとした ときの出来事を記しています
特に再建に尽力した 3 人の指導者 ゼルバベルエズラネヘミヤに焦点
を当て それぞれがどのように努力した
かを詳しく記しています ゼルバベルはイスラエルの大集団
がエルサレムに帰り 神殿を再建できるように導きました
それから約六十年後エズラがエルサレム に帰りつき
民にトーラーを教え共同体を建て 直しました
続いてネヘミヤが帰ってきて エルサレムの城壁の再建にあた
ったのです これらの 3 つの物語は並行して語
られる構成になっています 3 つとも
ペルシャの王が神に促されて指導 者の一人をエルサレムに送り
その働きを支援して始まります 3 人の指導者たちはいずれも反対
に遭いながら それを乗り越えます
しかしその結末は 3 つともある意味 で期待外れのものとなるのです
詳しく見ていきましょう 物語はペルシャのキュロス王が
神に心を動かされ エルサレムに戻って神殿を再建
せよ と捕囚の民に命じるところから
始まります 著者はこれは預言者エレミヤが
語った 捕囚はいつかエルサレムに帰還
するという 約束の成就だと言っています
この成就はイスラエルの民は捕 囚で終わらないという
ほかのたくさんの約束を思い起こ させます
例えばダビデの子孫から将来メシア なる王が出るという希望
神がご自分の民のただ中で臨在 する神殿の再建の希望
すべての国々の上に神の王国が 来て
アブラハムに約束されたように 祝福をもたらすという希望です
これらの希望を念頭に置いて ゼルバベルの物語を読んでいき
ましょう ゼルバベルという名前はバビロン

に植えられたという意味です 彼はバビロンの捕囚時代に生まれた
世代を代表していて エルサレムに帰還するイスラエル
人の一団を導きました 帰還した人々は犠牲をささげる
ための祭壇 そして後に神殿を再建しました
定礎式と献堂式は意味深い瞬間 でした
過去の天幕や最初の神殿をささげ た時のことを思えば
これは神の臨在を表す火と雲が 降りてきて
神が人と共に住まうその瞬間の はずでしたが
そうはなりませんでした だからこの新しい神殿の完成を
喜ぶ者もいる一方で ソロモンが建てた神殿を見たこと
のある年長者たちは その差を嘆いて泣きました
そこには前の神殿のような栄光 も将来への希望もなかったから
です そしてここで反対者に関する最初の
話が始まりますが それは奇妙な話です
捕囚に行かず ずっとエルサレムに住んでいた
イスラエル人の子孫たちがやって 来て神殿の再建を手伝うと申し
出るのですが ゼルバベルはこの神殿はあなた
たちとは関係ない と言ってそれを断ります
その結果対立を引き起こしました が
ゼルバベルはそれを乗り越えました しかしこれは不思議な話です
預言者たちは神の王国が到来する 時すべての国々と共に
イスラエルのすべての部族が 一緒になって神を礼拝するという
幻を見ていたのですから だからこれは期待外れの場面と
言わざるをえません 次のセクションでは時代は 60 年
進み エズラが登場します
エズラはバビロン捕囚にされた イスラエル人の指導者で
トーラーの学者であり教師でした ペルシャのアルタクセルクセス
王に任命されて 次の帰還民の一団を連れてエルサレム
に帰ったエズラは イスラエルの民に霊的社会的刷新
をもたらしたい と願っていました
期待は高まりますがここでまた 予想外の展開を迎えます
捕囚から帰った多くのイスラエル 人が捕囚にされずに
エルサレムの周辺に残っていた 者たちと結婚したことを
エズラが知るのです その中にはイスラエル人もいれば
そうではない人もいました エズラはトーラーにある
イスラエルはきよくあらねばならず カナン人と交わってはいけない

という戒めを主張します そして
エルサレムの周辺に住む異邦人 たちは
カナン人のように帰還民を堕落 させると警告しました
それから真摯に悔い改めの祈り をしたあとに指導者を集めて
このような異邦人との結婚は無効 であり
妻と子供を追い出さなければならない という法律を制定しました
しかし妻を離縁した男たちのリスト を見ると
この法律に従ったのは一部だけ だったことがわかりました
この物語には不思議な点がいく つかあります
まずこれは神がエズラに命じた ことではありませんでした
エルサレムの指導者たちが作らせ た法律だったのです
そしてエズラと同時代の預言者 マラキは
帰還民はきよくあるべきだと言って いますが
神は離婚を憎まれるとも言って います
この法律がもたらす矛盾が 物語のすっきりしない結末と合
致するのです 次のセクションではネヘミヤが
登場します ペルシャの王の役人になったユダヤ人
であるネヘミヤは エルサレムの城壁が崩されている
ことを聞くと嘆いて祈りました するとアルタクセルクセス王は
彼に エルサレムに戻って城壁を再建
する許可を与えたのです しかも護衛までつけ城壁修理に必要なもの
も与えました エルサレムに到着したネヘミヤ
は城壁の修理を始めましたが 彼もまた
エルサレム周辺に住んでいた者たち からの妨害に遭いました
物語は再び緊張の走る場面を迎え ます
同時代の預言者ゼカリヤは 神の王国の新しいエルサレムには
城壁がなく 神の臨在に囲まれていて
すべての国々から人々がやって きて契約の民に加わると言いました
しかしネヘミヤのしていることは この預言とは反対のように思え
ます 彼はエルサレム周辺の人々に
エルサレムにはあなたたちの住む 場所はないと言い
それは当然のように反感を買いました そのため
ネヘミヤは誠実に勇気をもって 彼が望んだ城壁再建に当たりました
が身を守るために武装しながら その仕事をしなければなりませんでした
読者としてはこの対立はどうに かならなかったのだろうか
という疑問が残ります この書の結びではまずよいことが

起こり次に悪いことが起きます エズラとネヘミヤはイスラエル
の民の霊的刷新のために 力を合わせました 2 人は祭りを行
うために帰還民をみな集め 7 日に渡り民にトーラーを読んで
聞かせ教えました そののち出エジプトと荒野の旅
を導いてくださった 神の誠実さを覚えて仮庵の祭り
をしました それから民は自分の罪を告白し
契約を新たにし トーラーに従うと誓い神殿と城
壁を再建したお祝いをしました 読者としてはこれがターニングポイント
になると期待しますが そうはなりませんでした
物語はこのあと残念な終わり方 をするのです
街を見て歩いたネヘミヤは 民が契約を守っていないことに
気づきます ゼルバベルの功績だった神殿は
打ち捨てられ その資格がない人たちに任されて
いました また人々はエズラが一生懸命教
えた トーラーをやぶって安息日に働いていた
のです それば かりかネヘミヤが再建した
城壁のまわりで 安息日に商売をしているところ
まで発見しました そこでネヘミヤは人々を殴り彼ら
の髪を抜き トーラーに従えと怒鳴るという
乱暴な振る舞いに出ました ネヘミヤ書の最後は
神よ私を覚えていてください私は 精一杯やりました
という祈りの言葉で終わっています 奇妙なエンディングですが
この様な期待外れの結末は何度 も意図的に
この書に組み込まれていたのです さてこの書は聖書全体の流れの中で
どのような役割を果たしている のだろうかという疑問が残ります
そもそもこの書はメシア神殿神 の王国に関する
預言的な約束に希望を持たせて 始まりましたが
そのどれ一つとして実現していない のです
イスラエルの民は故郷に帰ることが できましたが
彼らの霊的状態は捕囚の前と何も 変わっていないように思えます
エズラもネヘミヤも最善を尽く しましたが
彼らの政治的社会的改革は 人々の心の奥にある問題には対処
できなかったのです つまりこの書が教えているのは
エレミヤ書とエゼキエル書が強調 しているのと同じことで
神の民が神を愛し従いたいなら 心が一新される包括的に変えられる
必要があるということなのです そういうわけでこの書はハッピーエンド

ではありませんが だからこそ読者に知恵の書や預言
書を読み 神は契約の約束を成就するために
何をなさるのだろうか という問いへの答えを探るよう
促しているのです これがエズラ記とネヘミヤ記です

500 字要約

エズラ記とネヘミヤ記は、聖書の一部で、現代のほとんどの聖書では別々の書として分けられていますが、実際には同じ著者による一つの書物です。これらの書物は、バビロンがエルサレムとその神殿を破壊し、多くの民を捕囚にした後の出来事を記しています。それから約五十年後に一部のイスラエル人がエルサレムに帰還し、街を再建し、再びそこに住み始めようとした時の出来事を詳しく記しています。特に、ゼルバベル、エズラ、ネヘミヤの 3 人の指導者が再建に尽力し、それぞれがどのように努力したかを詳しく記しています。
ゼルバベルは、エルサレムに帰還した大集団を導き、神殿の再建を可能にしました。約六十年後、エズラがエルサレムに帰り、民にトーラーを教え、共同体を再建しました。そして、ネヘミヤが帰ってきて、エルサレムの城壁の再建に取り組みました。これらの 3 つの物語は並行して語られ、ペルシャの王が神に導かれて指導者をエルサレムに送り、その働きを支援するというパターンで始まります。3 人の指導者はさまざまな困難に立ち向かいながらも、それを乗り越えます。
しかし、これらの物語の結末は期待外れのものであり、実現しなかった希望や約束が多く存在します。エズラとネヘミヤは努力しましたが、民の霊的状態や社会的問題に対処できなかったため、物語は不完全な結末で終わります。
この書は、希望と期待が実現しなかった場面を通じて、神の約束と計画に対する読者の問いかけを促す役割を果たしています。神の民が真の変革を実現するためには、心の一新と包括的な変革が必要であることを示しています。そのため、この書は読者に知恵と神の計画を追求し、神の約束がどのように成就されるのかを考える契機となるものです。